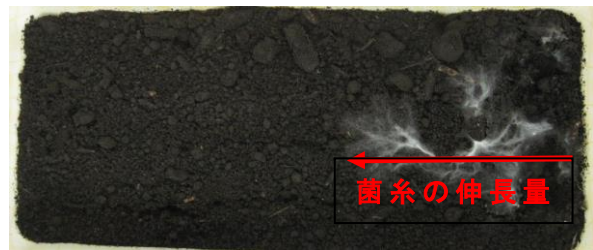


ナシせん定枝堆肥の循環利用に向けた白紋羽病発病危険度の判定

白紋羽病が発生したナシ園地では、本害の発生が懸念されるため、せん定枝を園外に持ち出して処分することが常識でした。そこで、堆肥として有効利用を図るために、発病危険度の簡易判定方法を開発しました。簡易法は、黒ボク土にせん定枝チップ堆肥を10%混合し、25℃で土壌における病原菌の菌糸伸長量を測定する方法です。2週間程度で発病危険度を判定でき、堆肥の熟度の指標とされている炭素率(C/N比)によらず判定できることが示唆されました。なお、本病未発生園ではフレールモアによる園内処理も可能です(※果樹研究新技術情報「ナシせん定枝のフレールモアによる園内処理技術」を参照)。



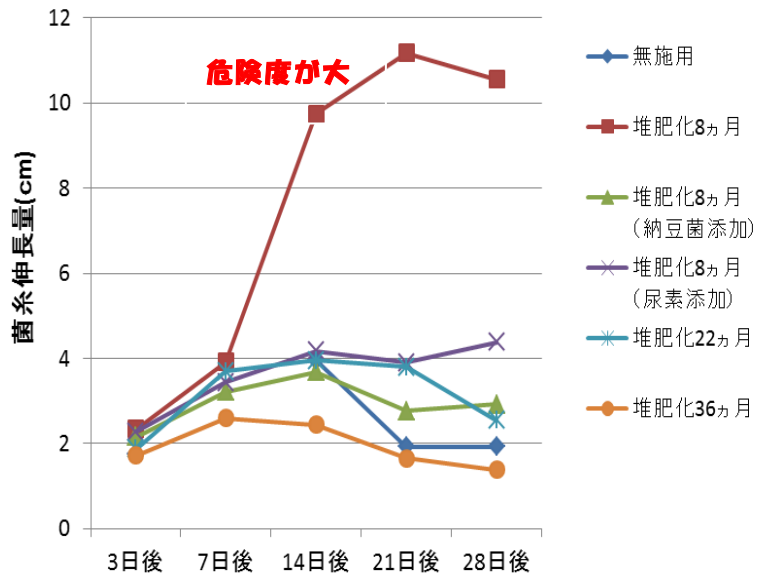
白紋羽病の発病株と根部に見られる白色菌糸



菌糸の伸長量による危険度の判定

堆肥の炭素率(C/N比)

堆肥化期間 (添加資材)	炭素率
8ヵ月	26.6
8ヵ月(納豆)	25.4
8ヵ月(尿素)	15.6
21ヵ月	17.2
6ヵ月	13.1



堆肥化中のせん定枝チップを混合した土壌における白紋羽病菌の伸長量の推移(25℃暗条件、病原菌培養枝の除去後日数)